

2003年河南・山西訪碑行報告

船田 善之

はじめに

筆者は、2003年3月7日から13日までの7日間、河南省鄭州市・滎陽市・濟源市及び山西省晋城市・沢州県・長治市・長治県・交城県において、史跡・石碑の調査を行った。本稿は、この調査の概要を報告するものである。本報告に関連して、飯山知保、井黒忍両氏と船田で作成した「滎陽・沁県・交城現存確認金元碑目録」を、本号に掲載しているのので、あわせて参照していただきたい。

筆者は、これに先だつ2002年4月26日から5月8日、井黒忍・飯山知保とともに、陝西・山西両省で史跡・石碑調査を行っている〔飯山・井黒・船田2002〕⁽¹⁾。メンバーの三名が華北地域、とりわけ山西の碑刻に関心があったため、この調査を計画したのであるが、当然のことながら、一度の調査で山西省各地を網羅することは不可能である。したがって、以後の調査継続を期しており、その第一候補として挙げたのが、山西省東南部の長治・晋城の両市域であった。当該地域の調査は、2004年8月に実現することになる〔井黒・船田・飯山2005〕。その予備的調査と位置づけられるのが、本稿で報告する調査で、筆者が単独で遂行した。さらに、筆者が当時からとりこんでいた、13～14世紀のモンゴル文書行政の研究の一環として、直訳体碑文を実見すべく、滎陽・濟源・交城をルートに組み込み、以下のような行程となった。

北京市－鄭州市－滎陽市－濟源市－博愛県－晋城市・沢州県－長治市・県－沁県－太原市－交城県－北京市⁽²⁾

筆者らが継続している石碑調査、ならびに調査報告・石碑目録執筆の目的や意義については、〔飯山・井黒・船田2002〕〔井黒・船田・飯山2005〕で述べているので、ここでは贅言しない。なお、2004年8月の調査と重複する寺廟（濟源市濟瀆廟・陽台宮・紫微宮、沢州県青蓮寺・玉皇廟、長治市城隍廟）に関する記述は、ごく簡略に留めたので、その詳細については〔井黒・船田・飯山2005〕を参照されたい。

行程日誌

3月7日（金）北京－鄭州－滎陽－鄭州 快晴

3:20 起床して身支度を整え、3:40 宿舎を出発。タクシーにて4:00到北京駅到着。定刻5:14より若干遅れた、哈尔滨駅発広州東駅行きT235次列車に乗り込む。

12:20 頃、鄭州駅着。まず、最初の目的地は、鄭州市街からみて南西方向に位置する滎陽市賈峪郷の洞林寺である。鄭州から賈峪郷へ直通のバスがあるかどうかかわからないので、タクシーをチャーター。1時間ほどで洞林寺に到着。境内には10基の碑刻

⁽¹⁾ 本稿の参考文献については、本号掲載の「滎陽・沁県・交城現存確認金元碑目録」の参考文献一覧を参照されたい。

⁽²⁾ 〔井黒・船田・飯山2005〕所載の地図を参照されたい。

が立っており、その中に、至正2年「鄭州滎陽県洞林大覚禪寺蔵経記」【1-13】⁽³⁾及び「聖旨之碑」【1-15】が立つ。前者の碑陰は「歴代分派之図」。後者は、聖旨二通・懿旨一通・法旨一通・令旨四通【1-1・6～12】が合刻される。風化・摩耗が激しく、大半の文字が視認できない。碑陰は、至正2年「鄭州滎陽県洞林大覚禪寺第一代西堂宝公大宗師頌古序」【1-14】。また、柵の中に石碑などが集められていたが、目視した限り、目を惹くものはなかった。タクシーの運転手に急かされ、寺を後にする。14:55 鄭州駅前に戻る。

バスで、河南省博物院へ向かい参観(15:30～16:40)。その後、中州古籍出版社を訪問してから、タクシーで「鄭州商代遺址」へ。土城を散策した後、徒歩で城隍廟へ向かうが、すでに閉門していた。民族大廈に投宿。



写真1 洞林寺「聖旨之碑」

3月8日(土) 鄭州—済源 快晴

8:55 城隍廟へ。廟内を参観した後、附近の文廟へ向かうが、開放されていない。10:00 過ぎ、二七広場近くで開封灌湯包のランチをすませ、タクシーで鄭州西バスターミナルへ。15分ほど待った後、11:05 その前から古滎郷行きの322路小型バスに乗車。11:40 紀公廟村で下車。唐宋元明清民国歴代碑刻があるという[文図豫:5]が、錠がかけられており参観できない。村人に尋ねるも、廟内には人はいない、帰宅した、とのこと。古滎郷の各寺廟参観も予定していたが、今後の行程を考慮して諦めることにする。程なく、復路の322路がやって来て市内へ戻り、13:00 馬路バスターミナルへ。

13:20 済源行き的高速バスに乗車。15:00 頃、黄河を渡河し、15:35 済源新バスターミナル着。タクシーで、15:55 奉仙観着。学生である旨を告げると、学生券はないと

⁽³⁾ 【 】内の数字は、後掲の「滎陽・沁県・交城現存確認金元碑目録」のIDに対応する。【1-13】ならば、表1のID13の石碑である。

言われるが、無料で参観させていただいた。
16:25 参観を終え、徒歩で濟瀆廟へ。16:40 から閉門直前の17:55 まで参観。寝宮前の敷地を取り囲む形で碑廊が建つが、正方形の碑廊のうち北側の一辺のみ、つまり寝宮の両脇に 10 数基の石碑が嵌め込まれるのみで、ほかの三辺の碑



写真2 濟瀆廟寝宮（両脇に碑廊がある）

廊には石碑はない。今後の整備が計画されているものと思われる。実際、境内の何箇所かに整理中とおぼしき石碑が無造作に積み重ねられていた⁽⁴⁾。また、濟瀆廟の清源門をくぐった先、2004年8月整備中の碑亭は、この時点ではまだ存在せず、金碑も立っていなかったことを補足しておく。6路小型バスで街の中心へ戻り、金秋賓館に投宿。

3月9日（日）濟源—博愛—晋城 快晴

9:15 王屋山行きのミニバスに乗車。10:35 王屋山旅游区着。しばらく徒歩で紫微宮を目指す。途中でミニバンタクシーに出くわしたため、チャーターする。11:05 紫微宮着。境内は、改修中。ウイグル字添え書きがあることでも著名な懿旨碑は、煉瓦などで支えられて横向きに立っている状態であった。11:50 参観を終え、王屋山旅游区入り口まで戻り、12:15 陽台宮着。1時間ほど参観。近くで昼食をすませ、13:50 濟源市内へ向かう中型バスに乗車。

承留郷下観村の靈都観を参観すべく、14:30 途中下車。村人に訊いたところ、麻姑廟が山の方にあることはわかったものの、靈都観については、要領を得ない。下観村というところ、それなら隣村の学校の中にある、とのこと。14:50 幹線道路に戻り、徒歩で下観村へ向かう。途中、自転車に乗った二人の女性に、徒歩でどのくらいかかるか訊ねたところ、結構かかるが、歩けない距離ではないとの答え。彼女らは 20mほど進んだ後、戻ってきて、私たちは二人乗りで行くから、この自転車を使うように、と案内してくれることに。15:10 靈都観着。ここでの目的は、乙巳年（1245）「濟源靈都観給文碑」〔蔡白(10)〕〔陳道(072)〕〔祖白(13)〕（碑陰：大徳八年「靈都観万寿宮図碑」

⁽⁴⁾ 今後は、こうした未整理・整理中の石碑をどのように確認するかも課題となる。

[文図豫：176]・庚戌年（1250）「済源靈都宮懿旨碑」[陳道(091)] [中金：5] [中金目：8] [祖白(18)] であったが、見当たらない。比較的年代が新しいと思われる石碑が、石段として再利用されているのみであった。壮年の教員はよく事情を知らないようだが、その後、初老の村人に訊ねると、文革で破壊されたとのことであった⁽⁵⁾。15:30 同観を後にし、15:55 幹線道路まで徒歩。程なく市内へ向かう 52 路がやって来る。

16:30 公交バスターミナル着。次の目的地は晋城であるが、済源から晋城のバスは、一日に午前と午後一便ずつで、14:30 発の午後の便はすでに出てしまっている。しかし、あるいは国道まで出れば洛陽から晋城へ向かうバスをつかまえることができはしないか、と考えて、バイクタクシーで新バスターミナルへ。そこで、バスの車掌・運転手らに訊ねると、そのうちの一人が博愛からなら晋城行きのバスが多いから、そこまで行けばよい、とのこと。17:00 焦作行きの小型バスに乗って博愛を目指す。18:25 博愛バスターミナル着。しかし、すでにバスターミナルの待合室は閉まっている。ミニバンやバイクタクシーの運転手に訊ねたところ、バスはもうないが、ここから数 km の月山駅に行けば 20:00 頃の列車があると言う。バイクタクシーに乗り、18:40 月山駅着。しかし、時刻表で確認すると、列車（商丘発太原行き 2502 次）は 22:37 発であった。後悔の念に駆られながら、カップ麺を買って夕食に代える。

定刻より 10 分ほどして列車が到着するが、乗客が降りたとたん、なんと車両の乗降口ドアが閉じられてしまう。これから乗り込もうとする乗客や駅員が右往左往する中、とうとう、車両の窓から乗車することに。中国の列車の窓は、ホームからだ一般成人の背丈より高い。車両内の乗客、本駅での乗車客、駅員の見事な連携により、無事全員が乗車できた。そのときは、それどころではなかったが、振り返ってみるに、北京・上海はもちろん、中くらいの地方都市でもみられなくなった在りし日の中国が体験でき、かなり貴重な経験であったと思う。23:50 頃、晋城駅着。ホームの端から駅を出、真っ暗なところでわずかに数台のタクシーが客引きをしている状況に衝撃を受けるが、近くにいた女性が駅正面へ誘導してくれる。ミニバスで市内へ向かい、先ほどの女性が推薦してくれた鳳台賓館に投宿。

3月10日（月）晋城・沢州—長治 晴

バスでの移動を試みるが、青蓮寺行きのバスがないため、9:30 ミニバンをチャーターする。10:30 青蓮寺着。1時間ほど境内を見学。12:40 高都鎮東嶽廟を訪れるが、閉門しているため、参観をあきらめる。13:15 府城関帝廟。戲台や多数の清碑があるが金元碑は存せず。

14:10 府城村玉皇廟。廟は小高い丘の上に建つが、坂の手前で、入場券を購入するよう言われるので購入。玉皇廟に入ると、また入場券を購入するよう言われる。下で購入したと言うと、それは下の財神閣の入場券だと言う。確かに下には楼閣が建っているし、入場券を改めて確認すると財神閣と明記してあった。仕方なく、新たに入場券を購入する。廟内の宋金元碑を検分。14:40 ミニバンに乗り、次の目的地へ向かおうとすると、突然三人の老人が何やら喚きながら、ミニバンの前に躍り出てきた。う

⁽⁵⁾ ただし、[文図豫：176] [王屋志：121] は「靈都觀万寿宮図碑」を含む歴代碑刻が残るとしており、あるいは 1990 年頃までは同観に残っていた可能性もある。

ち一人は松葉杖を振りかざし、ミニバンの行く手を塞ぐ。あつけにとられている我々に、駐車場を払えと要求してくる。運転手が、しばらくやり合うが、行く手を塞がれている以上、事態打開策はない。運転手が2元ほど渡すと、通行させてくれた。

16:05 南村鎮二仙廟へ。現在は司近村衛生庁・老齢委員会として利用されている。市民の憩いの場となっており、屋内からは麻雀の牌の音が聞こえてくる。清碑が確認されるだけであった。市内へ戻り、16:30、晋城市博物館へ向かうが、あいにく休館日であった。

17:00 長治行きの中型バスは、晋城市バスターミナルを出発、19:00 に長治市バスターミナル着。附近の福泰和麗都賓館に投宿。ホテルのレストランで夕食。久々のまともな食事に箸が進んだ。

3月11日（火）長治—沁県 曇時々雨

8:55 タクシーをチャーターする。9:15 長治県正覚寺へ。錠がかけられているが、村人が開けてくれる。3基の残碑があるが、1基が確認できないほかは、明清碑。この後は、市区を廻る予定だったが、運転手が県区出身で県区の寺廟に詳しいというので、案内してもらうことにする。10:15 五龍山へ。乾隆碑が確認できた。10:50 如意寺。最近殿宇を改築する際に出土したという明代碑記が横たわっているほか、建築の石柱に目を惹かれた。11:40 黄梅寺。数基残る清碑から、同寺が以前は文廟だったことが知られる。同寺の和尚さんもタクシーに同乗して市内へ戻る。12:35 市内の紅梅寺へ。

13:15 観音堂へ到着するが、閉門中なので参観はあきらめる。

13:35 博物館へ行くが、昼休み中で14:00に開館するとのこと。13:45 二賢廟。清碑が確認された。14:15 潞安府上党門へ。往時の潞安府の情景が偲ばれる。嘉靖12年（1533）「新開潞安府治記」が立つ。14:30、城隍廟。立派な建築に目を奪われつつ、急ぎ足で歴代碑刻並び墓誌を検分する。15:15



写真3 潞安府上党門

再び博物館へ戻る。ここでタクシー代を精算。博物館の展示で目を惹いたのは、歴代墓葬展示の金元墓及びその壁画であった。

人力車でバスターミナルへ。16:30 太原行きの中型バスに乗り、18:00 沁県着。新世紀大酒店に投宿。

3月12日(水) 沁県—太原 雪のち曇

雪が降っており、北上してきたことを実感する。8:45 県城西のダムのある南涅水石刻館へ。1957年に発現した北魏～宋代の窖藏の仏像・石塔・碑刻が展示されている。「碑碣拓片展覧」では、大定29年「沁州銅鞮縣王可村修建昭慶院記」・貞祐2年(1214)「洪濟寺額記」(以上二碑ともに上載が尚書省礼



写真4 南涅水石刻館

部牒)・至元21年(1284)「大元国沁州銅鞮縣王可村河唐録部整(?)」の拓本が展示されていた。奥には碑廊があり、元豊3年(1080)「威勝軍新建蜀蕩寇將□□□關侯廟記」・大定15年「靈岩院勅黄記」【2-1・2】及び拓本が展示されていた「沁州銅鞮縣王可村修建昭慶院記」【2-3・4】が立つ。10:25 タクシーをチャーターして、西湯郷南牛寺村の龍珠寺へ。雨雪によって道が悪くなっているため、途中から徒歩で。11:30 着。改修中の境内で明清碑を確認。僧侶の方にお茶をごちそうになり、殿宇の改築中に出土したという木彫りの仏像を見せていただく。12:10 寺を後にする。

13:40 県城に戻り、国道208号沿いで太原行きのバスを待つ。数分で中型バスが到来、無事乗車する。16:30 太原市建南バスターミナル着。公共バスで太原駅へ。并州飯店に投宿。

3月13日(木) 太原—交城—太原—北京 雪のち曇

8:15 タクシーで太原西バスターミナルへ向かう。本日の目的地は交城県の古刹玄中寺である。運転手の薦めで、3kmほど郊外でバスを待つことにする。これは、バスが市内で客引きをするため、時間をロスしてしまうからである。8:40 離石行きのミニバスに乗車、9:40 交城バスターミナル着。ミニバンで玄中寺へ向かう。幹線道路から山道に入ってしばらくしてから、運転手が、考えていたより遠い、当初決めた20元では少なすぎる、上乘せしろ、と言ってくるが、取り合わない。若干陰悪な雰囲気のまま、10:00 玄中寺着。駐車場には客待ちのタクシーなどみえなかったが、最悪徒歩で幹線道路まで下山すればよいと判断して、運転手に20元を払って引き取ってもらう。

境内は多くの箇所が改修中であった。しかしながら、奥手の山腰から雪に彩られた玄中寺を眺めると、古刹の名にふさわしいことが実感された。大雄宝殿の前に2基の碑亭があり、右側には、至順3年(1332)重刻の元和8年(813)碑が、左側には泰和

4年(1204)重刻の開元29年(741)碑が、それぞれ収められる。大雄宝殿の外側壁には5基の石碑が嵌め込まれる。そのうち、1基は、泰和7年「章宗皇帝遊仰山御製」(天曆3年刊)【3-9】である。千佛閣の下手にある改修中の建物の中に歴代碑刻が並んでいる。元碑としては、1289年「交城県石壁山玄中寺フビライ聖旨

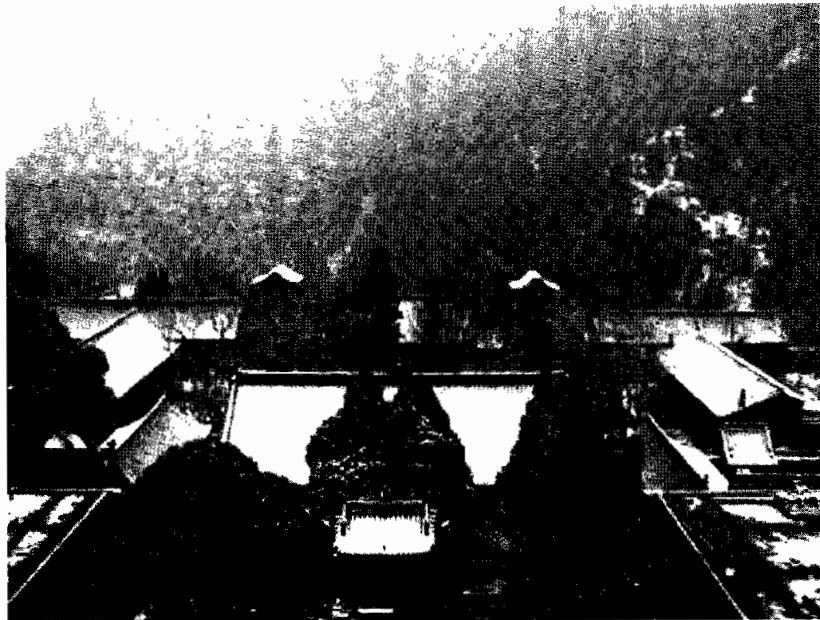


写真5 玄中寺

碑】【3-6】・至元15年「大龍山石壁寺圓明禪寺遺行之碑」【3-4】・辛卯年「中書省疏」【3-1】・至元11年「宣慰謝公述修考妣功德之記」【3-5】・元貞元年「宣授太原路都僧錄安公行碑」【3-7】・大德11年「宣授上都路都僧錄寬公法行記」【3-8】が確認された。壁と石碑との間が狭いため、一番端に立つ聖旨碑の碑陰がようやく視認できるほか、他の碑陰はほとんど視認が不可能であった。境内の参観を終え、山門を出ると、壁に4基の石碑が嵌め込まれている。元碑としては、甲辰年「懿旨・鈞旨碑」【3-3】・辛卯年「公拋碑」【3-2】が確認された。

事務室で「刹玄中」を購入した折り、職員の方が帰りの足の心配をしてくれ、幹線道路までバイクで送っていただいた。11:55 幹線道路に出る。程なく汾陽発太原行きの中型バスが到来。13:10 太原市西バスターミナル着。13:30 山西人民出版社・山西古籍出版社の出版社ビルへ向かうが、14:30 まで昼休みとのこと。そこで、まず昼食をとり、并州飯店で預けておいた荷物を受け取る。15:00 出版社ビルへ向かう。快く対応していただき、後日、探索本の在庫を確認した上で、連絡をもらうことになる。

15:40 長距離バスターミナル。16:20 発、北京行き的大型バスは出発し、夜半に北京麗沢橋バスターミナル着。バスとタクシーを乗り継いで宿舎に帰還、2年間の中国滞在中最後となる調査旅行を無事終えることができた。

(ふなだ よしゆき 日本学術振興会特別研究員・東京大学)